

富山市民プラザ 後編

富山市民プラザには多様な施設が内包され、外観は軽快で変化に富んでいる。前編では、この建築が街の活性化の中核施設、また、都市の顔として計画された経緯を紹介した。後編では、施工者が現場で遭遇した出来事と、施設運営者の努力を紹介する。

吹抜けから光が降りてくるエントランスホール。上部のガラス窓の向こうに見えるのはアートギャラリー。内部を巡りながらさまざまな空間に出会っていく。



富山市で初めて 地下二階の掘削に挑む

富山市民プラザは、ガラスのト
ップライトが目を引くアトリウム
を設けた中央棟が二階建て、音楽
ホールが最上階にある左翼の棟は
四階建て、さらに市民学習センタ
ーと市立外国語専門学校などが入
っている右翼の棟が七階建てであ
る。また、地下一、二階には駐車場

と機械室などが設けられている。
施工においては、普通の規模に思
える地下階の地業工事が、一つの
チャレンジであった。

施工に携わったのは佐藤工業北
陸支店を代表とする五社JV（鴻
池組、林建設工業、日本海建興、
近藤建設）。「富山は地下水が豊富
で、地盤を五層以上掘ると水が大
量に出てくるんです。排水が不能
になり、地盤が崩れてしまうこと

もある。そのため、当時の市内で
地下一階より深い建物はありませ
んでした。しかし、富山市民プラ
ザは地下二階の計画で、約一〇層
掘る必要がある。それをなんとか
してやろうということになったん
です」。このプロジェクトで副所
長を務めた蔭島邦男氏が説明して
くれた。

水量の多い地盤では、止水性が十
分ではなかった。富山市民プラザ
が着工した八七年当時、新たに止
水性の高いコンクリートの連続壁
を手早くつくれるソイルミキシン
グウォール（SMW）工法が普及
し始めており、佐藤工業JVはこ
れを採用して、市内で初めての地
下二階に挑むことにした。

出水のリスクに備えつつ 武家屋敷跡の古井戸の噴出を 短時間で止める

しかし、それだけで十分ではな
かった。「大手町のあたりは江戸
時代に武家屋敷があった場所、

大手モールに開かれた富山市民プラザの前庭。ゆったりしたオープンスペースで市民イベントも開かれる。

地下には二つの水脈が上下に通
っているという。深さ六〜八層の
地盤が「神通川」の水を含み、そ
れより深い砂の地盤の下には「常
願寺川」の水脈が流れている。神
通川は岐阜高山の山岳が源流、常
願寺川は北アルプス立山連峰を源
流とする第一級河川で、ともに富
山湾に注ぐ水量豊富な川だ。とく
に下層の常願寺川の水は被圧水と
いって、地層に挟まれ大きな圧力
がかかっている。そのため、一〇
層近く掘ると被圧の高い水が噴き
出してくる危険にさらされるのだ
という。敷地周囲の地盤を抑える
山留工法も、八〇年代の中頃まで
は、鋼板を重ねながら打ち込み、
壁をつくるシートパイル工法など
が使われていたが、富山のように



地下の掘削工事。周囲に連続壁の山留めを施工し、掘り下げている。残された市病院の地下室などの解体と並行して、地業が行われた。（提供：佐藤工業株）



エントランスホールの突き当りの共用スペースは、市民の居間のように使われている。左手には下校途中の小学生の姿も。



佐藤工業在籍時代に、現場の副所長を務めた蔭島邦男氏。

井戸が何本も地中に残されていたんです」と、当時の現場監督、佐々木利海氏。「直径一五センチほどの竹の筒が三〇センチ以上も深く埋め込まれていました。筒の中は泥でおおよそ塞がれてはいたんですが、まだ生きていて、ちよろちよろ水が出てくる。被圧の高い水が押し上げたら、いつ噴き出すかわかりません」。注意深く掘りながら青竹が出ると止水していった。ところがある日の掘削中、ちよつとした隙を突くように一本の青竹が顔を出し、勢いよく水を噴き上げた。このとき、佐藤工業JVは工事前から出水に備え、協力会社からダムやトンネルなどの止水対策に経験豊富な技術者を集めており、即座に処理にあたった。古井戸を囲んで土嚢を二層の高さまで積み

上げ、その中で水位を上げて、噴出する水圧力を弱める一方で、櫓を組んで水ガラスの注入機械をセットし、上から注入した。緊急事態とあって水ガラスは三秒で固化するよう調合したという。「ところがこのポイントを止めると、他の処理済みの井戸のうち何方所かで水を吐きだして、一時はもぐら叩きのような状態でした」。もう、水を止めるのは無理だと諦めかけたときに、ようやく全体が静まったという。出水から一日半が経っていたが、スピーディーな対処がものを言った。佐藤工業は江戸時



躯体の鉄骨工事。地下2階の掘削を成功させ、躯体が立ち上がっていった。(提供：佐藤工業(株))

代末期に常願寺川流域などの治水事業から発祥した建設会社で、難しい局面を切り抜けたのも、多くの経験と実績があったからだ。それでも、蔭島氏は「備えをしてあったとはいえ、自然を相手にするのは、なまやさしいものではないと痛感しました」と振り返った。

精度の高いデザインと納まりに込める

横文彦氏がデザインした富山市民プラザは、設計精度がきわめて高く、部材や部品もオリジナルで製作された。佐藤工業北陸支店にとって、建築デザイン事務所が設計した建物を施工するのは初めての経験であり、多様な空間構成の中に、個別の用途をもつ施設群をつくり込むには、大きな努力が必要だった。

その中で、蔭島氏が心を動かされた場面がある。「われわれ技術屋は、現場に飛び込んでから設計者の方々の考え方を読み込んでいくものです。横先生は、私一人でものをつくるのではありませんよ。ゼネコンさんも、メーカーさんも

施工者より

完成できたことが喜びとなり、よい建築を見る機会が増えました



佐藤工業株式会社北陸支店 建築事業部 建築部工事部長 佐々木利海 Toshiaki Sasaki

地元の地下工事には慣れていましたが、古井戸から急に水が噴き出すような経験は市民プラザの現場が初めてのことです。いつ止められるのか、止まらなければ地盤が崩れる恐れもあるので、まったく死ぬような思いを味わいました。市民プラザの敷地からは、結局二〇本も青竹の井戸が出てきました。しかし、そのおかげで、後に富山の市庁舎や国際会議場の施工に臨んだときは、落ち着いて地下工事にかかることができました。この経験から学んだ段取りの仕方、

技術面の注意点などは、これから若い技術者たちに伝えていきたいと思っています。建物が竣工したときは、やっと終わったという安堵感だけでしたが、少し経ってから建物の写真撮影があつて、カメラマンを案内するために内部を回っていると、これを自分たちがつくったんだという感激が湧いてきました。それから私の建築を見る眼が変わったというか、いい建築を見ようという気になってきました。いろいろな作品を見たときに、この設計者は、きつとこんなことがしたかったんだろうと自分なりに考えたり、手がけている現場の参考になったりすることもありま。

市民プラザができてから、周辺のイメージは変わって明るくなりました。皆さんが市街地へ出かけるときのポイントになっていますし、職員の方々の努力もあつて、とても親しまれています。

運営・維持管理者より

市民プラザは富山市民の大切な財産 毎年、メンテナンスを行ってきました



株式会社富山市民プラザ マネージャー 村石雅彦 Masahiko Murakami

富山市民プラザは、官民共同出資で設立した株式会社で、建物の建設と運営を行っています。私はオープン当初に初の民間からの社員として入社し、自主イベントの企画などに携わってきました。私たちは市民の裏方です。少しものの見方を変えれば毎日の暮らしの中で楽しいことができるという意味を込めて「生活価値創造」というコンセプトを掲げています。ここ一〇年継続しているアートマーケットは、市民の方々が手作りのものを出品して賑わっています。

最近、お母さんと赤ちゃんが楽しめるイベントをアトリウムで始めました。いままで赤ちゃんを対象としたものはありませんでした。少し大きくなれば、子供たち向けに開いている手作りワークショップに来てもらうきっかけにもなるでしょう。プラザの利用が充実するよう、情報の発信をもっと行っていかなければならないと思っています。

建物を維持管理するのも私たちの重要な仕事です。毎年、地元の設計事務所、施工した佐藤工業や設備会社の方に来ていただいて、全員で建物を見て回りと、今年はこのから修繕しましょうと決めていきます。デザイン面に影響が出そうな変更があるときは、設計事務所から横総合計画事務所に相談していただくこともあります。価値の高い建物ですし、なによりも市民の財産ですから、今後もしっかりと守っていきたいと考えています。



2階のアトリウムは約400㎡。展覧会、コンサートの他さまざまなイベントに使われている。この日はリズム体操の講座で賑わった。

協力してください。一緒に、今一番いいものをつくりませんか？とおっしゃったんです」。現場を納めることに奔走した佐々木氏も「デザインについては妥協されな

いんですが、どのようにつくるか、コミュニケーションを重ねて、われわれの力を引き出していかれるんです」。現場に常駐していた所員の人たちにも、建築にかける純粹な意気込みを感じた。二年弱の工期が迫る最終段階では、設計サイドも施工サイドも持てる力を出し切っていたという。

第三セクター方式の運営で、市民の活動を支え続ける

オープンしてから二三年目を迎えた富山市民プラザ。大きく構える美術館や、大ホールなどの文化施設とは対照的に、市民が自分たちの場所として日常的に訪れ、文化やスポーツに親しみ、創造力を発揮する場になるよう運営面にも力が注がれてきた。

プラザを訪れた日、おもしろい光景を目にした。高く吹き抜けたエントランスロビーへ入ると、正

面に共用スペースがあり、オープンテーブルに椅子、ベンチが置かれている。そこには市民学習センターで始まる料理実習に参加するらしい主婦が待ち合わせる姿。一人、本を読みふける初老の男性。ちよつと休憩中の親子連れ。ランドセルを横に置いて宿題のノートを広げている小学生。ショップを見ながら歩いてきた女性や、外国語専門学校に通う学生たちがテールの横を通り過ぎていく。さまざまな年代の人たちが自分の居間のように使っているのだ。その情景は、この建物の役割が果たされていることの証のようだった。



アンサンブルホール。308席。市民が音楽の発表会などを行う晴れの舞台。この日は設置されているピアノの調律が行われていた。